

かみす

Pick up

- ▶ 神栖市総合防災訓練
- ▶ スポーツ少年団団員募集

特集

東日本大震災 十年の記録と記憶

2011年3月11日、神栖市は大きな地震に襲われました。傾いた電柱、波打つ道路、鳴り響く津波警報のサイレン。鹿島港には、高さ5.7mとみられる津波が押し寄せました。ライフラインを寸断され、断水で不自由な生活を強いられた日々。あれから10年——震災の記憶を未来へつなぐため、神栖市の東日本大震災を振り返ります。

AR

広報かみすが
動き出す



[COCOAR2]



アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は12ページ

特集

東日本大震災

十年の記録と記憶

今年の3月11日で、東日本大震災から10年が経ちます。震災から学んだことを未来へつなぐには、あの日を忘れずに語り継いでいくことが大切です。いま改めて貴重な証言から当時を振り返り、皆さんと共に震災について考えたいと思います。

あの日、神栖市で何が起きたか

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とする巨大地震が発生し、神栖市は震度5強の激しい揺れに襲われました。2時50分、市は災害対策本部を設置。市内の各避難所に、続々と市民が避難し始めます。3時14分、大津波警報に伴い市内全域に避難勧告。直後の3時15分に、茨城県沖を震源とする震度6弱の地震が発生。3時32分には津波第一波が到達。ライフラインが寸断され、液状化で道路がめくれ上がり、この日を境に私たちの平穏な日常が奪われました。なおも大地は揺れ続け、3月末までに112回もの余震が発生しました。

液状化で標識や電柱が傾いた国道124号線

2011

3月11日
午後2時46分 地震発生、神栖市で震度5強を記録
午後2時50分 神栖市災害対策本部設置
午後3時15分 地震発生、神栖市で震度6弱を記録
午後3時32分 津波第一波到達
午後4時40分 津波第二波到達
※市内全域で断水

3月12日
午前11時00分 自衛隊の派遣要請

3月13日
茨城県により災害救助法の適用が決定される(3月11日から適用)
自衛隊が到着。午後から給水車による給水活動開始

証言 1 神栖消防署

神栖消防署では、地震発生と同時に全車両を車庫外に出して出動準備態勢を整え、指揮本部を設置。困難を極めた消防活動の様子を、高度救助隊副隊長・消防司令補の高木源史さんと金田圭吾さんに教えてもらいました。

「あの日は、津波が来る中を建物火災の現場へ出動しました。消防車は水没を避けるため迂回を強いられ、その迂回路も道路が隆起している状況でした。何とか現場に到着し、消火活動を開始しましたが、消火栓は断水のため水が出ず、防火水槽は水没して場所が分からず使用を断念。津波の海水を汲み上げて放水を試みたものの、水位が安定しないため十分な放水ができず、鎮火するまで苦労しました」

非番だった高木さんは家族と連絡がつかないまま即座に消防署へ駆け付け、夜まで無我夢中で救助や消火に奔走したそうです。

「活動を終えて消防署へ戻る際、どの道路も大渋滞でした。暗い中を歩いて帰宅する方が多く、不安からなのか涙を流しながら歩いている方

もおり、手を差し伸べることもできず無力さを感じました」

発災直後から数日間は119番通報が鳴り止むことはなく、受信・処理件数は、3月11日150件、12日132件、13日81件に上りました。

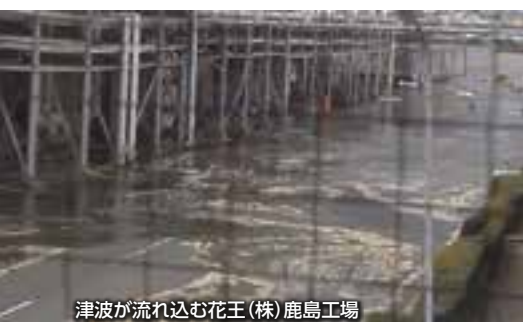
証言 2 鹿島臨海工業地帯

地震発生から約2時間後の午後4時40分ごろ、鹿島港に最大波となった津波第二波が到達。津波は岸壁を乗り越えて市内に達し、自動車やコンテナが多数流出。工業地帯は甚大な被害を受けました。当時の状況について、花王(株)鹿島工場プロダクション部門部長の三戸成巳さんに教えてもらいました。

「地震発生時、工場内にいた約350人全員が中央制御室2階に避難し、人的被害はありませんでした。工場の敷地内では、液状化による道路陥没やパイプラック損壊などが発生しました。また、津波により鹿島港の底が見えていたと従業員から聞いています」

その後は復旧に奔走する日々が続きました。

「全プラントが復旧したのは約2カ月後です。その間、心の支えと



津波が流れ込む花王(株)鹿島工場



津波に流されたコンテナ



液状化により地中から噴き出した泥水



煙に包まれた鹿島臨海工業地帯



地割れが起き、大きくうねった道路



災害対策本部

なったのは、製品を待つお客さまや、早期復興に惜しみなく尽力する従業員、家族や友人、そして何より、もう一度工場を元の姿に戻したい」という強い思いでした。震災から学んだのは、事前の備えの大切さ。この体験を次の世代へ引き継ぎ、地域の方々と一緒にできることを普段から考えていきたいと思っています」

市内全域が断水

地震による断水は長期に及びました。その理由は、鰐川浄水場が壊滅的な被害を受け、鹿行水道事務所からの送水管も破損し、市に水が入ってこなくなったこと。さらに液状化により、市内に張り巡らされた配水管の損傷が激しかったことです。復旧工事をしようにも通水試験を行なう水がなく、破損箇所を見つけることができません。送・配水管は全長約670kmに及び、やみくもに掘り起こすこともできず、県からの供給再開を待つしかありませんでした。市では水道課、防災安全課を中心に総力をあげて応急給水の手配と送・配水管の復旧に取り組みました。3月26日に一部地域で上水道が復旧し、5月7日に全面復旧。市内全域

が断水したのは県内で神栖市のみ、全面復旧は関東で最後となりました。

証言 3 断水の中での支え合い

断水で不自由な生活を強いられる中、市民の間には温かい「共助」の輪が広がっていました。松井則子さん(大野原)の体験を紹介します。

「自分一人では水を運んでくることができなかつたため、近くに住む家族が毎日、給水所へ行って水を届けてくれました。また、近所の『井戸』を使用してください』という張り紙に心が温まり、ありがたく使わせていただきました。」

水道が復旧したときは、その便利さに改めて感動しました。震災により近所の方と交流が生まれ、当時声を掛けてくださった皆さんには感謝の気持ちしかありません。大変な時こそお互いを思いやり、助け合う心が必要なのだと実感しました。この気持ちをいつまでも忘れないようにしたいと思っています」

証言 4 給水活動ボランティア

ボランティアで市内全域に水を届けてくれた市民がいます。岩井正さん(知手)が始めた活動は、復旧・復

神栖市復旧・復興10年の記録(抜粋)



2016年 波崎総合支所・防災センターオープン(5月)



2013年 鹿島港復旧
津波ハザードマップ発行(3月)



©茨城新聞社

2011年 給水活動ボランティア(写真は岩井さん)
市内全域で断水が解除(5月7日)
神栖市震災復興計画策定(9月)
地盤の液状化対策のための調査開始

2016

2015

2014

2013

2012

2011

2014年 液状化ハザードマップ発行(3月)
神栖中央公園ふれあいの丘オープン(6月)



2012年 第一回神栖市総合防災訓練(3月)
市独自の津波避難計画シミュレーション事業開始(6月)
津波監視カメラ運用開始(10月)
砂丘整備事業開始



興を支える大きな力となりました。

「知人宅の井戸でご近所さんへの給水を手伝ったとき、ペットボトルを重そうに運ぶお年寄りの姿を見て、水の配布を思い立ちました。最初は1人でしたが、釣り仲間が協力してくれて、最終的には約15人で活動しました。軽トラック4台に、それぞれ500ℓ入りのタンクを積み、市内全域へ毎日井戸水を運びました。水が必要な方の家まで行き、浴槽を満タンにして、次の家へ。マンションの3階まで、仲間たちと水をリレーしたこともあります。約2カ月にわたり、平均で1日5t、多い日は9tほど配布しました。」

ライフラインが使えなくなったとき、頼りになるのは人と人のつながりです。そこで情報交換もできます。ご近所付き合いの大切さ、地域の絆の大切さを再確認しました」

震災の教訓を生かして

震災から得た教訓は、さまざまな面で生かされています。消防の分野では、全国の消防隊が被災地へ駆け付ける「緊急消防援助隊」がさらに強化され、鹿島地方事務組合消防本部では大規模災害に対応するための

「高度救助隊」が発足しました。

市では『神栖市震災復興計画』を策定し、液状化や津波に対する防災力を強化しました。さらに、配水場の1つを耐震構造に建て替え、震災以後は耐震構造の配水管を採用するなど、ライフラインの強靱化を進めています。

防災安全課の佐々木信課長と安井貴弘課長補佐は「大規模災害時は自助・共助が極めて重要となります。実際に、震災時は避難所への物資の寄付、井戸水の提供、ボランティアなど、市民の皆さんの協力に大変助けられました。その経験を踏まえ、例えば高い建物を津波避難ビルとする、災害発生時に物資や工事を優先的に提供していただくなど、市内外の事業者や団体と多くの災害協定を結んでいます」と語ります。

新成人の思い

震災時に10歳だった子どもたちは、今年新成人となりました。彼らは震災で何を感じ、いま何を思うのか、宮川愛弥さん(神栖)に話を聞きました。「地震が起きたのは小学4年の英語の授業中で、あちこちの教室から悲鳴や泣き声が聞こえてきました。



2011



2018年 新知手配水場運転開始(3月)
神栖消防署高度救助隊発足(9月)



宮川さん(成人式実行委員)

2021

2020

2019

2018

2017

震災当時10歳だった子どもたちは、今年成人式を迎えた——



2019年 液状化対策事業完了(3月)
かみす防災アリーナオープン(6月)



グラウンドへ避難しましたが、液状化で地面が割れて水が湧き出るので、ものすごい恐怖を感じました。

帰宅すると、液状化のため自分の家も傾いていました。大変な中でも近所の人たちが声を掛け合って生活したのを覚えています。

やっと日常が戻ってきたと実感できたのは、グラウンドが使えるようになってみんなでサッカーをしたとき。本当にうれしかったです」

就職して社会人となった今も、毎年3月には震災を思い出すと言います。

「震災の時、助け合いが一番大切だということに気がきました。当時は子どもだったので何もできませんでしたが、大人になったので今度は自分が周りの人を助けたいと思っています。今年はコロナ禍の中、成人式典を開催していただけたことに感謝しています。私たちから感染が広がらないようみんなで我慢し、また当たり前の日常を取り戻していきたいです」

「日常」の尊さを胸に刻み、明るく前を向いて話す宮川さん。まちの未来を担う若者の言葉が、頼もしく響きました。